

毛原第一墓・庸原第一墓の調査

仲 間 留 美

1. 毛原第一墓

1. 位置と環境

島の北西部、ミシユク村跡の西側、涸れ川を挟んだ砂丘上に立地する（第1図）。周辺は採砂工事によりくぼ地となっており、人骨等の保管場所として工事関係者によって設置されたものである。この一帯は「毛原」と呼ばれていることから、毛原第一墓と命名した。

2. 調査経過

砂丘での採砂工事の際に人骨及び獣骨等が露出したため、工事関係者により採砂現場に保管施設が設置された。その後、島内の土地整備工事等により、所有者不明の古墓から検出された人骨も一緒に保管されていた（図版1）。この施設は、約1.5m四方の立方体で、自然災害にも十分絶えられるようコンクリート製になっており、上からコンクリート製のフタを被せるものであった。人力では開封できないため、地元業者にユニックでフタを持ち上げてもらい、設置した関係者立ち合いのもと現地で人骨の分類作業を行なった。人骨の保存状態は良好で、砂丘からの人骨と古墓の人骨は区別して保管されていたため分類作



第1図 毛原第一墓・庸原第一墓の位置



遠景



近景



保管状況



保管されていた人骨



分類作業の様子

図版 1 毛原第一墓の周辺・調査の状況

業もスムーズに進んだ。現在得られた資料は、人骨は琉球大学、その他共伴遺物は県立博物館で保管している。人骨は、調査員の土肥直美琉球大学助教授により分析作業が進められ、共伴遺物に関しては、県立博物館で整理作業を行なった。

3. 資料紹介

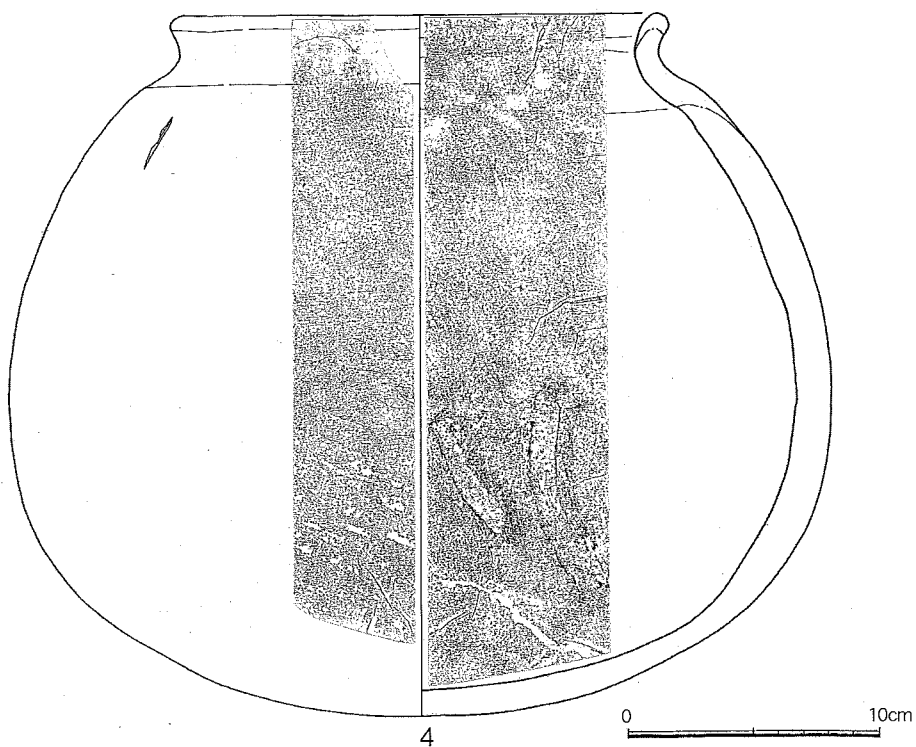
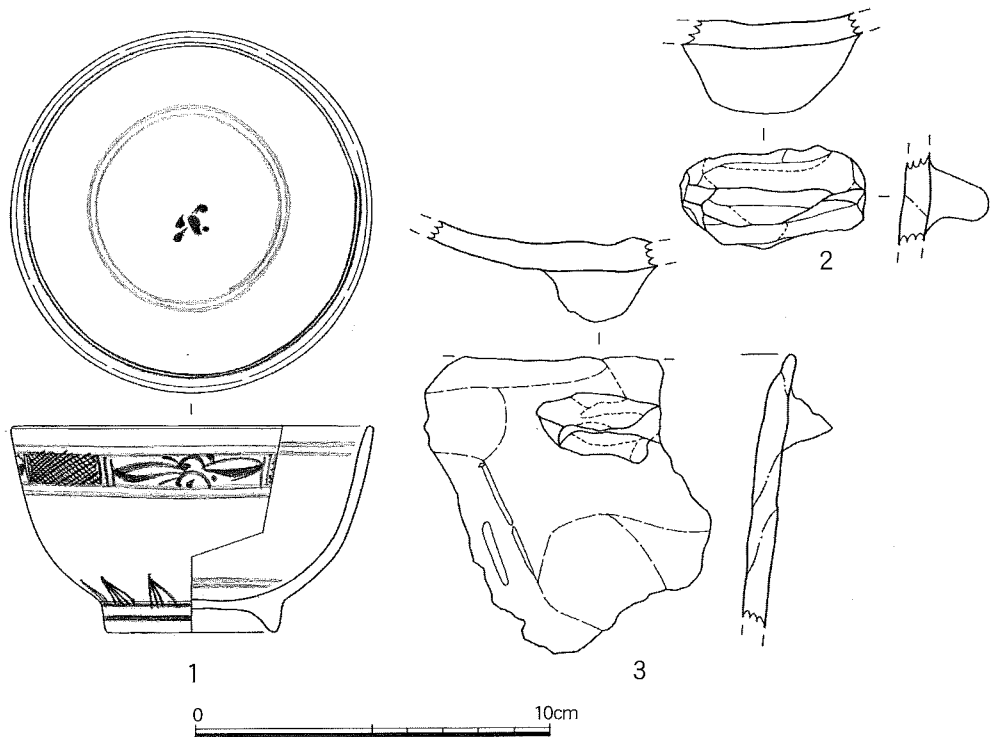
人骨、獣骨及び人工遺物6点が得られた。人骨に関しては、土肥氏により報告されるため(P. 96～)、ここでは、人工遺物についてのみ記載する。人工遺物の内訳は、土器5点、染付1点で、小片の無文胴部片2点をのぞく、4点を図示した(第2図、図版2)。

第2図1は、染付の直口口縁の碗で、型造りによる成形である。呉須はやや鮮明で、釉は艶のある白色。外側面の口縁には二条一組の界線の間が八つに区画され、1区画に斜格子と花?の文様が交互に描かれている。また、高台外面には二条の界線、高台際の間隔を空けた蓮弁文が描かれている。内側面の口縁部及び見込みにも二条一組の界線がみられ、また見込みには解釈不明の小さな文様が描かれている。釉は高台内面及び畳付けまで施し、口唇には茶褐色の釉薬が施されている。口径10.6cm、底径4.8cm、器高6.0cm。

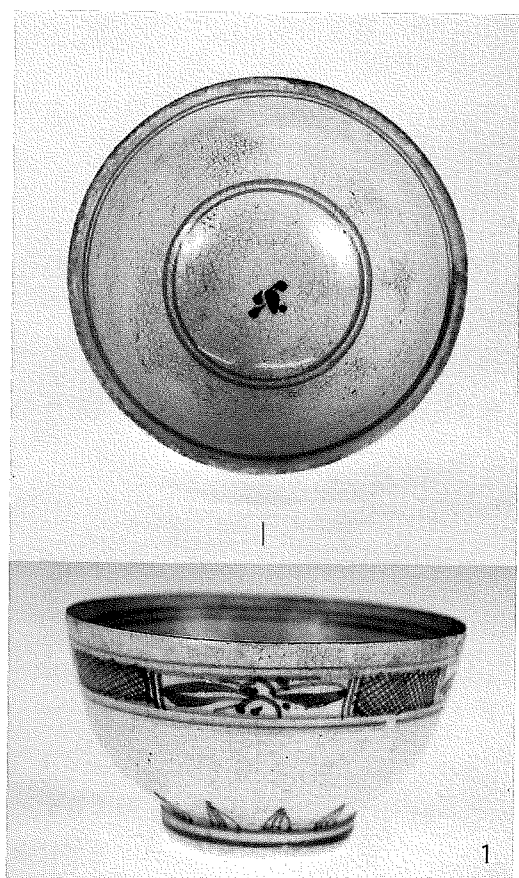
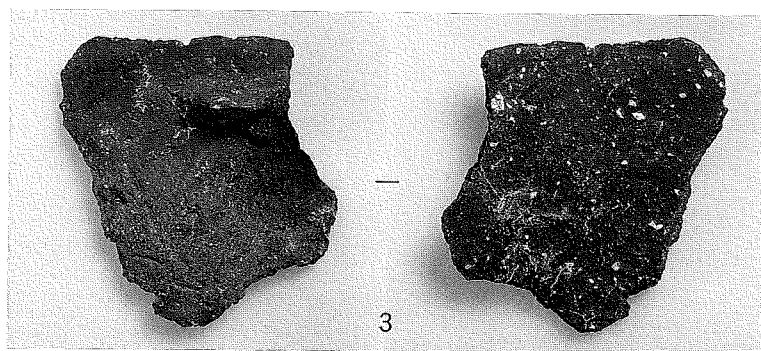
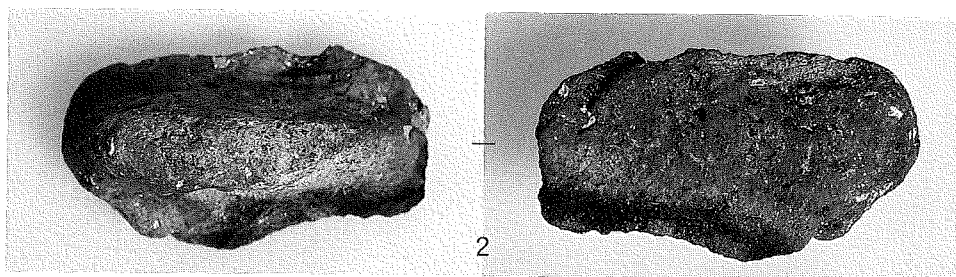
第2図2は、把手破片である。把手の大きさは、幅1.0cm、残存部の長さ5.2cm、厚さ1.6cmであった。把手の造りは、ナデや指圧で丁寧に調整され、内面の器面調整も比較的丁寧である。器色は、外面が明茶褐色、内面が茶褐色。焼成は良い。胎土は細かく少量の貝殻の細片、石灰質の砂粒を含む。器厚は0.7cmを測る。⑫の人骨に共伴。

第2図3は、雑な外耳(横耳)を貼り付けた口縁部片である。耳の位置は、口唇から9mm下である。耳の大きさは、幅1.8cm、残存部の長さ3.5cm、厚さ1.5cmであった。口縁は僅かに外反し、口唇の形態は尖り気味である。外面は雑なナデ調整で、内面は外面よりも丁寧なナデ調整を施す。器色は、外面が淡褐色、内面が明茶色。焼成は良好で硬い。胎土は粗く、少量の貝殻の細片、石灰質の砂粒、石英等を僅かに含む。器厚は0.7cmを測る。⑧の人骨に共伴。

第2図4は、パナリ焼の資料で約半分が欠損している。ややナデ肩の丸底の壺で、口唇は外反し、全体的に欠いている。胴部上面には、長さ2.3cm、幅0.2cmのヘラによる刻み文が見られる。器面調整は丁寧で、外面の口縁から胴部にかけてはナデ調整、底部は丁寧な篋削りが施されている。内面の器面調整は全体にナデ調整が施されているが、底部付近は全体的に調整時の指圧痕が残る。器色は、外面が暗褐色、内面は口縁が暗褐色で底部は茶褐色。焼成は良く硬い。胎土は細かく、少量の石灰質の細砂粒を含む。器厚は1.0～1.6cmを測る。推算によるサイズは口径19.4cm、最大胴径32.2cm、器高27.3cmである。



第2図 毛原第一墓の遺物 (1. 染付 2・3. 土器 4. パナリ焼)



図版2 毛原第一墓の遺物（1. 染付 2・3. 土器 4. パナリ焼）

II. 庸原第一墓

1. 位置と環境

前集落の南西方向、幅約10mの岩盤の南西方向岩陰に立地する（第1図）。洞口は西南西の方角、奥行き3.0m、幅5.7mである（第3図）。周辺は以前田んぼとして使用されていたが、近年荒れ地となっていた。この一帯は「庸原」と呼ばれていることから、庸原第一墓と命名した。

2. 調査経過

庸原地区圃場整備工事により土地整備が行われているため、緊急に調査に入った。7月の調査時点で土地整備が進み、岩陰墓を残すのみであった（図版3）。人骨は十数袋の土のう袋に入った状態で、岩陰墓内に保管されていた。また、検出された人骨に関しては地元の新聞に無縁仏の広告が出されていて移動ができなかったため、現地で分類及び計測を行った。共伴した人工遺物に関しては、県立博物館で整理作業を進めた。人骨は、8月の期限以降は毛原第一墓に保管されている（1998年3月現在）。

3. 資料紹介

人工遺物の内訳は、染付4点、キセル1点、貝製品1点の計6点である。その内4点を図示した（第4図、図版4）。人骨に関しては土肥氏により報告されている（P. 96～）。

第4図2は、タカラガイの背面部を打ち欠いていたもので、研磨調整は施さず、ヒモズレ痕も見られない。法量は、殻長3.2cm、殻幅2.3cm、孔の長径2.1cm、孔の短径1.3cm、重量6.4gであった。

第4図1は、金属製のキセルの雁首である。パイプ型で、羅字接続部が破損しているもののほぼ完形である。首部の湾曲は弱い。法量は長さ5.9cm、火皿径0.8cm、羅字接続部径1.0cm、重量11.8gであった。

第4図3は、肥前系の染付で直口口縁の小杯である。呉須はやや鮮明で、釉は淡い青白色。外側面は、簡略化された折枝松、烏らしきもの等の文様が描かれている。また、口縁部及び高台外面にそれぞれ一条の界線をめぐらす。内側面は、見込みに「元」の文字、口縁部及び見込みに一条の界線がみられる。釉は高台外面の途中で釉削ぎされ、畳付け及び高台内面は露胎。畳付けは外内面より削り出して成形している。口径4.5cm、底径2.0cm、器高2.9cm。

第4図4は、雲南系の染付で、逆「八」字状に開く浅い碗である。外面には轆轤痕が顕著に見られる。呉須は不鮮明で、釉は灰色がかった白色。施釉の範囲は、外面は畳付けまで施し、外面下部には指痕らしきものがみられ、高台内面は露胎。また内面は見込みまで

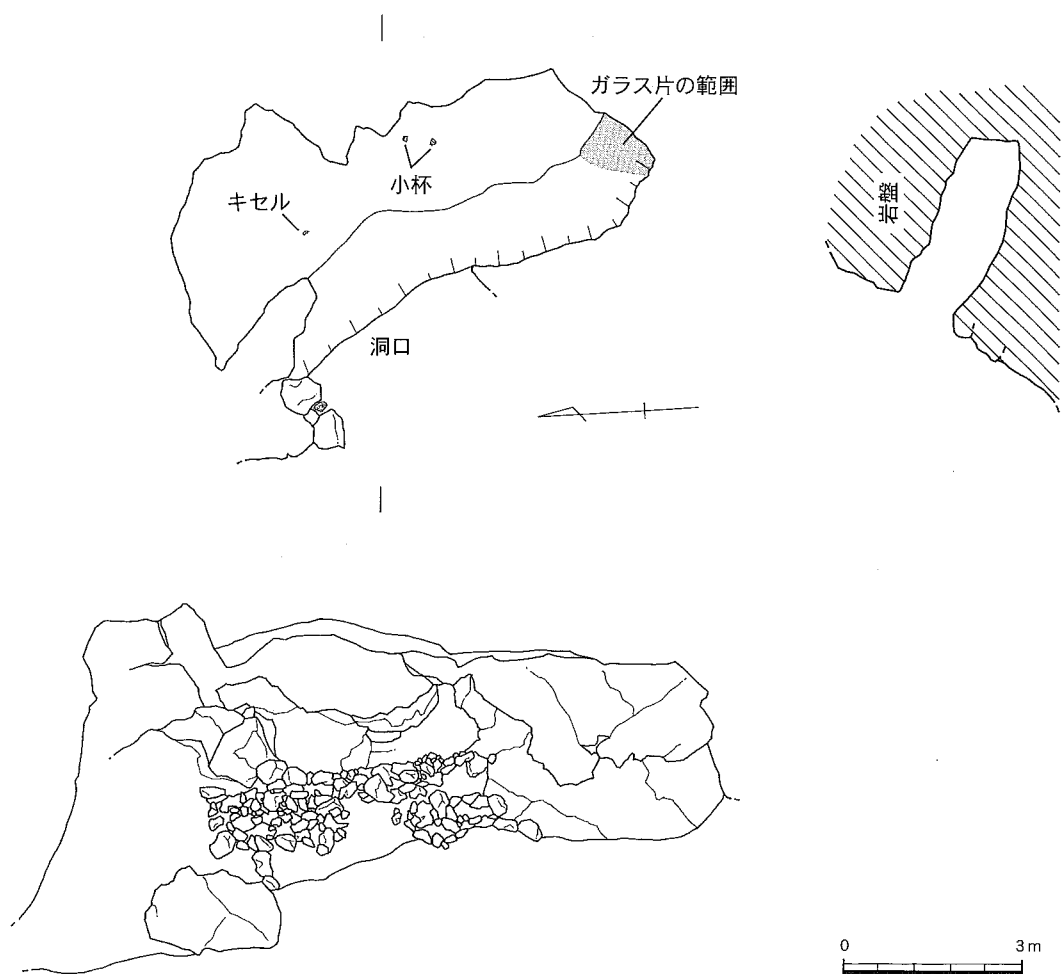


近景

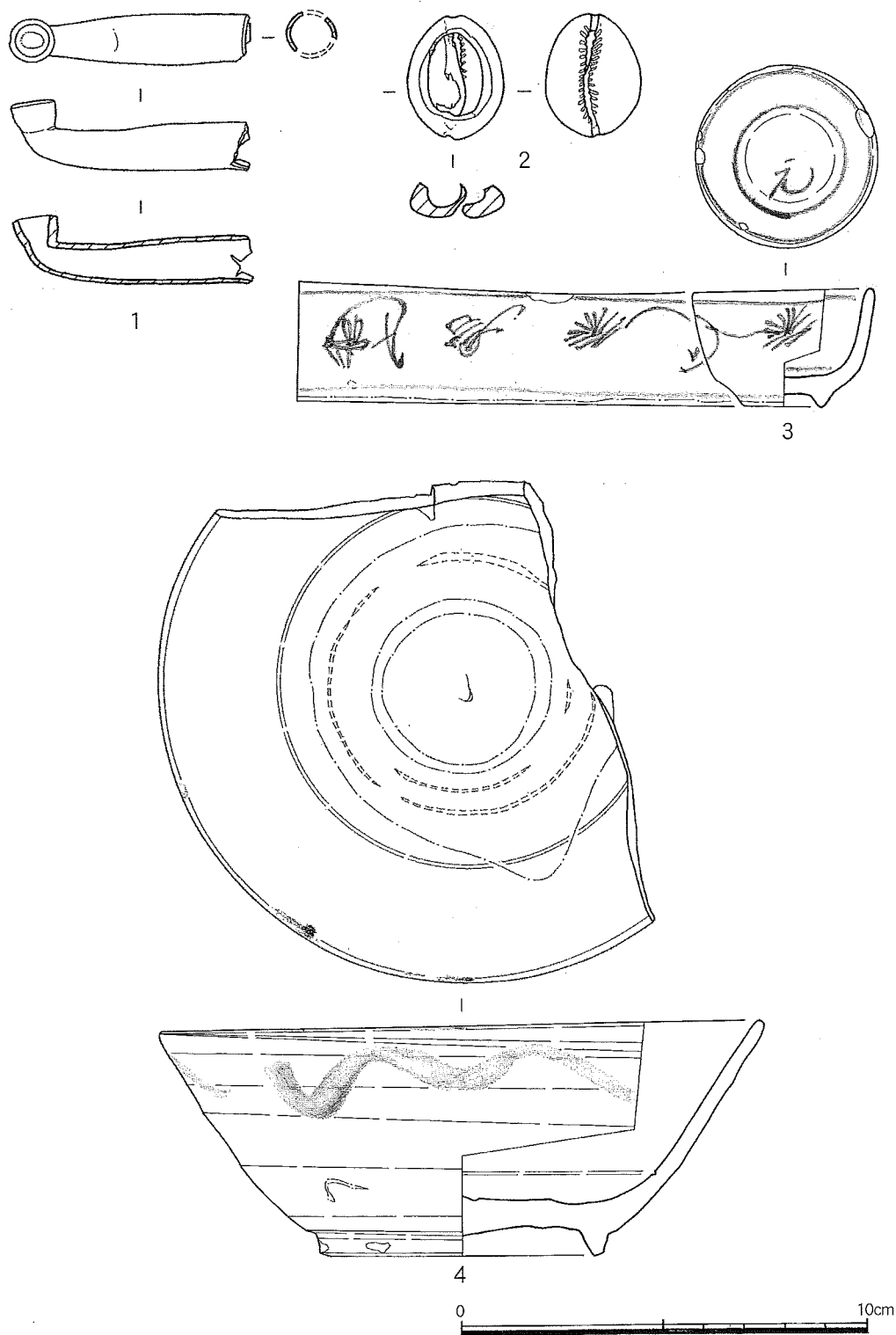


調査の状況

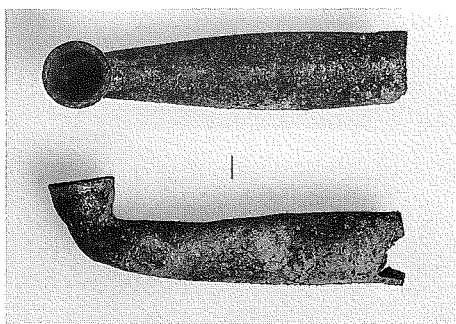
図版3 庸原第一墓の周辺・調査の状況



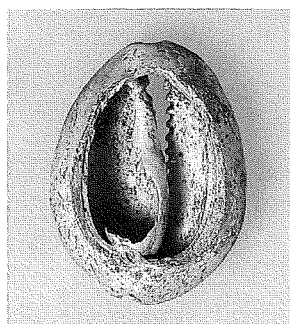
第3図 庸原第一墓（正面図・平面図・断面図）



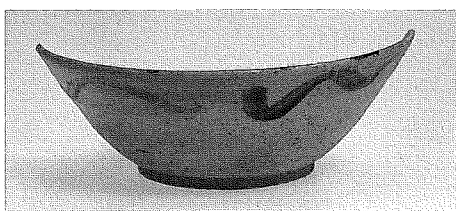
第4図 庸原第一墓の遺物（1. キセル 2. 貝製品 3・4. 染付）



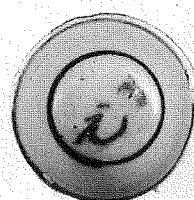
1



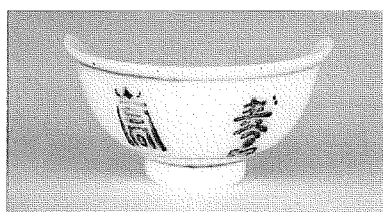
2



4



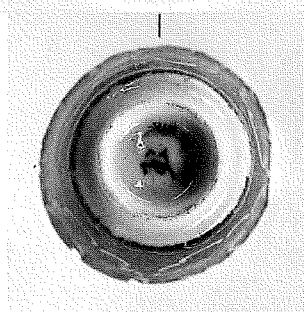
3



5



6



図版4 庸原第一墓の遺物 (1. キセル 2. 貝製品 3~6. 染付)

は及ばない。外側面の口縁には、途切れた波状の文様が描かれている。内側面の見込みには、彫りによるものと白色の界線がそれぞれ一条ずつ施され、アルミナも見られる。高台は蛇の目状に成形。口径14.9cm、底径7.0cm、器高5.8cm。

近世またはそれ以降と思われる染付2点は図示していないが、図版4で写真紹介した。

図版4の5は、口縁の反りが強い小杯である。呉須はやや明瞭で、釉は艶のある白色。スタンプ印判で2つの文字らしきものが交互に施される。口縁、高台付近及び高台境目に各一条ずつ界線をめぐらす。型造りによる成形である。口径5.6cm、底径2.0cm、器高3.0cm。

図版4の6は、口縁が僅かに反る腰折れ杯で、口縁は数ヶ所破損しているがほぼ完形である。畳付けを除く全面に釉が施されている。呉須はやや明瞭で、釉は艶のある青白色。外面全面には、銅版転写により雲の中を泳ぐ龍の文様が施されている。また、外底面に「玉」の字が施されている。口径5.8cm、底径2.7cm、器高3.8cm。

III. 調査の成果

ここでは、毛原第一墓及び庸原第一墓の調査成果をまとめる。

どちらも工事後の調査でであったため、人骨並びに共伴遺物の検出状況が押さえられなかった。しかしながら、毛原第一墓の砂丘から検出された人骨は、その目安となる共伴遺物の検出状況等が不明であるためあくまでも参考資料にとどまるが、外耳土器と同時代のものと考えられる。また、庸原第一墓の人骨については、共伴した資料などを見ると古くは遡らないと考えられる。

今後とも土地整備等で古墓が整備される可能性がある。現在、島内に散在する古墓の分布調査については、瑞慶山・津波古両氏が今回報告しており（P. 255）、その詳細な調査が今後必要である。

最後に、篆書については現時点での解説は難しいとのご教示を大城民子氏よりいただきました。

参考文献

1. 『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県文化財調査報告書 第29集 沖縄県教育委員会 1980年3月
2. 大橋康二『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』理工学社 1994年5月
3. 『カイジ浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書 第115集 沖縄県教育委員会 1994年3月
4. 『慶来慶田城遺跡』沖縄県文化財調査報告書 第131集 沖縄県教育委員会 1997年3月
5. 『古我地原内古墓』沖縄県文化財調査報告書 第85集 沖縄県教育委員会 1987年12月